

海外研修報告書より

参加者提出の「海外研修報告書」より抜粋(原文・記入者名なし・1名ずつ掲載)

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

・自分の担当教科に関する知識を増やしたい。

→農業に関する施設をたくさん見学させていただき、話を聞くことができた。また、農業に関わる方とながりを持つことができ、今後の授業に活かせる材料を手に入れることができた。【達成度100%】

・各訪問先で1つは質問しようと話を聴き、主体的に学ぶ姿勢で取り組む。

→正直、自分にとってあまり興味がない分野の話を聴くときでも、何か自分の教科や生徒に伝えられることはないかと話を聴くことができ、主体的に学ぶことができた。【達成度80%】

・視野を広く持つことができるようになる。

→様々な学校に勤務されている先生方と共に学び合い、深めることができた。12日間という短い期間であったが、学校で取り組んでいる教育や考え方などを話すことができ、とても密度の濃い時間を過ごすことができた。また、毎日その日の学んだこと感じたことを振り返る時間があり、同じことを見たり聞いたりしているなかでも、自分以外の7名の先生方の考えや感じたことなど共有でき、いろんな角度から物事を見る視点を少し身に付けることができた。【達成度80%】

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

研修プログラムで、現地で活動している協力隊の方を訪問し、お話を聴かせていただくことができた。

自分の専門的な技術を伝えること、広めることは簡単なことではないんだと感じた。農業においては、気候なども日本と全く違うし、現地の人は何十年何百年とその土地で生活を繋いできたわけであるので、いきなり日本から来たよくわからない人にこっちのほうがいいよと言われても、なかなか受け入れない気持ちになるのは仕方のないことだと思う。その中で、隊員の方々が積極的に地域の人たちとかかわりを持ち、信用を得たりすることで初めて、受け入れてもらうことができ、理解しやすいように、比較栽培などに取り組み、数字で結果を伝えるなどの工夫をして、現地の人々の生活が少しでも良くなるようにと一生懸命活動している姿に心打たれました。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

「海外で活躍する茨城県出身の人」として出会った方々を紹介し、生徒とオンラインで関わる場を設け、キャリア教育にもつなげたい。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

首都のカンパラでは交通量が多く信号もないため、渋滞がひどく、それを緩和するために立体交差を建設している事業を見学させていただいた。日本人の方が現場の指揮をとっていて、何百人とウガンダの人々を動かしていることに驚いた。また、建設して終わりではなく、現場で働く人たちのヘルメットをかぶるなどの安全教育や、歩道橋をちゃんと使うように住民の交通マナーの指導なども行っており、JICAの事業を通して人を育てている面が素晴らしいと思いました。

5. ここまでの研修に対して「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

○これまでの研修に対して良い!と思ったところ、

・研修後の授業をどのように行おうかと不安だったのですが、出発前の研修で、一緒に行くメンバーとアイデアを出し合い、構想を練ることができた。

○今後あるといいなと思う視点

・出発前の研修がもう一日あるといいなと思います。

ウガンダで行う交流授業について話し合う時間があまりなく、現地で夜に集まって打ち合わせをしたりしないといけなかったのが、少し大変だった。でも、それもいい思い出ではあります。

6. その他全般を通じての感想・意見など

とても貴重な経験になりました。この研修で学んだことを学校に戻り、生徒たちに還元していきたい。この研修が今後のキャリアの分岐点になると思います。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

目標1「開発途上国を自分の立っている場所と地続きの場所だということを示し、生徒の行動変容に資する」…現在20%

本校はつくば市という国際都市に隣接しており、世界が身近にある環境といえる。しかし生徒の国際問題に対する関心はそこまで高くない。今後取り組みを行う中でウガンダ／アフリカ／世界のことを自分事として捉え、行動する生徒も増えると感じている。今回私がこの研修に参加したことで、ウガンダという国名は校内で広まった。私の活動に関心を寄せて声をかけてくれた生徒もいる。よってこの時点での達成度は20%としたい。

また、他者や社会に関わろうとする態度の涵養は高校国語の全科目において設定されており、国語教員として今後授業を通して目標達成に向けた努力をしていく。

目標2「国際交流は特別なもの、という認識をなくす」…現在50%

国際理解教育は英語や社会の先生のもの、という先入観を現場で感じる。また本校には国際交流の部署があるため、そこが中心となって進めるのが普通である。国語科で、国際交流の部署でもない「ただの学級担任」が国際理解教育の研修でアフリカまで行くというのは話題になり、多くの先生方に「(国語の先生なのに)なんで？」と声をかけていただいた。国際理解教育は全員が当事者であるということを伝え、本校を県内のリーダー的存在にしていきたい。数年後、誰が国際理解教育の取り組みをおこなっても「なんで？」と言われない環境にできるといいなと思う。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

ウガンダで働く方々の目的意識や探究心の強さ。特にコンゴヨウム保全活動の〇〇さんが「英語が苦手」とおっしゃっていたことが印象に残っている。私自身も流暢に話せるわけではないが、英語圏の地域で過ごす中で、言語は目的ではなく目的に必要な道具なのだと実感した。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

・「困っているから助けてあげましょう」という正義感だけではなく、仲の良い友達に手を貸すのと同じような感覚として国際理解を考えさせたい。日本の生徒とウガンダの人たちのそういった関係の構築に今回の経験を活用できたらいいなと思う。

・教員の仕事を上で「分かってほしい、分かった気になるな」という言葉を大切にしているが、国際理解教育でも大切なことだと思う。分かりたいと思わせることと、奥深さや難しさを理解させることを両輪として考えながら授業を組み立てていきたい。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「魚の釣り方を教える」ところ。直接的な物資の支援や現状使いづらい機械の支給ではなく、実情に合った支援をしていると知ってとても丁寧でこまやかだと感じた。数年後の現地がどうなっていくべきかで考えて長期スパンで人の育成をしていってほしい、まさに教育そのものだと興味深かった。

5. ここまでの研修に対して「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・青年海外協力隊の隊員さんをはじめ、現地で活動しているたくさんの日本人の方とお会いできたこと。任地に伺ったり会食で一緒に食事したりした際に有意義なお話をたくさん聞かせていただいた。

・はじめはウガンダという国についてや、農業を通じた日本とのつながりなどを学び、後半にかけて子どもや教育という我々の専門分野の研修をさせていただいたところ。この国における教育の位置づけや社会や家庭の背景に何があるのかという知識を学び、解像度が上がった状態で子どもたちに接することができたと感じている。

6. その他全般を通じての感想・意見など

・初日付近のブリーフィングで疑問に思ったことを質問しそびれ、その後考え続けたことを数日後に有識者の方とお話しする機会に答え合わせができたという経験をした。短い期間に多くを学ぶために「疑問はその日に解決」という目標を立てていたが、多くの原因を想定し、研修中次々に入ってくる新しい視点で熟慮して、よりよい質問を立てることも大切なことかもしれないと感じた。(私は“よい”質問を即座に思いつくことができないので、調べたら分かるようなことを聞いてしまうこともあった。せっかく有識者に直接伺える貴重な機会なのに……)

・日本との共通点や相違点をたくさん発見することができた。授業で使う際、これらの事実「良いもの」「悪いもの」という価値観をできるだけつけずに提示するということを心がけたい。良し悪しはその国の文化や各人の考え方によって決まるものであり、日本の常識で「これは良くないから“改善”すべき」とすることは相手を尊重しない意志決定になりうることをウガンダで改めて学んだ。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

「(1)ウガンダの文化、人々の生活や考え方、直面している課題と現状に対する理解を深めることができる。(2)現地での学びを日本の児童生徒に伝えることで、児童生徒が世界に目を向けるきっかけを作ることができる。」を個人目標として研修に参加した。

(1)について、現地では、農業、教育、ジェンダー、自然保護、インフラ整備、難民支援など多くの視点からウガンダについて知ることができた。また、様々な課題の原因や対策を自分なりに考え、それらを研修に参加した教員間や現地で活動されている方々と共有・協議することで、自分だけでは気づけなかった視点を持つことができ、さらに理解を深めることができた。

(2)については、今後の授業実践が主となるが、事前に生徒に対してアンケートをとったことで、生徒の興味関心に合わせた教材収集ができた。また、情報や課題の提示、授業展開をどのようにするのが生徒の学びに有効かという視点を持ちながら現地での研修に参加できた。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

様々な分野の事業を視察したが、いずれの分野においても、正しい情報を得ることが発展に必要な不可欠だと思い知らされた。また、その役割を担うのが教育なのだと感じた。しかし、教育はただ知識を授けるだけではなく、得た知識をどのように活用するか、生じた課題をどう解決するか、自分たちがより良く生きるにはどうすれば良いかなど、人々の考え方や生き方に直結している。その基礎となる学校教育は、非常に重要な役割を担っていると感じた。教育の力について身を持って感じるとともに、教師という職業の素晴らしさを改めて感じることもできた。また、学校についても、ただ教科指導をする場ではなく、児童生徒の安否や健康状態を把握する場、全ての子ども達の安心安全を確保する場であるということを確認することができた。

次に、ウガンダ人は非常にフレンドリーで寛容な印象を受けた。ウガンダ人の寛容性で最も印象的だったのは、難民支援における「オープンドアポリシー」である。ウガンダは難民を積極的に受け入れており、受け入れた難民に対し、起業や教育、医療など国民と同様の権利を与えているという話を伺った。また、「お互い様」という精神が根強く、難民と国民の間に軋轢が生じていないということも衝撃的であった。難民＝“負担”という固定観念から脱却し、地域社会や平和の担い手とするウガンダの人々の考え方は、私たちが学ばなければならない考え方であると感じた。ウガンダ人の寛容性が必ずしもプラスにのみ働いているとは限らないが、その寛容性は、国籍、人種、性別、障害の有無、年齢などに関係なく多くの人間が見習う必要があり、この視点が世界全体の開発や発展に繋がる可能性を強く感じた。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

生徒に事前アンケートをとった際に、「ウガンダ＝アフリカ＝開発途上国＝お金がない＝かわいそう」というイメージを持っている生徒が多い印象を受けた。これまでの経験からマイナスなイメージを持っている生徒が多いが、肯定的な面も数多くあるということに生徒が主体的に気付く授業にしたい。また、マイナスなイメージを持つ原因として、事実を知らないためにイメージが先行してしまうという面もあると思う。そのため、写真や動画等の資料、現地の方々や隊員の方々の話など現地に行ったからこそ得られた教材を通じて、ウガンダの現状を知ったり、ウガンダの状況をより具体的に想像したりできるようにする。しかし、生徒が持っているマイナスなイメージのうち、貧困など実際の課題であるものも多い。それらについては、“かわいそう”という感想で終わらせるのではなく、原因や対策、自分にできることを考えられるようにしたい。

4. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

ものやお金をただ渡すのではなく、現地に合わせた方法や道具の提案、持続可能な仕組みづくりをはじめとする、現地の方々の自立を踏まえた協力を感銘を受けた。また、一方的に押しつける協力ではなく、実際にその良さを現地の方に感じてもらい、現地の方の自発性を促す協力であることが印象的だった。JICAの国際協力事業について知っていたものの、他国や他団体と比較した際に、JICAの国際協力事業にこのような強みがあることは、本研修に参加するまで知らなかった。今回の研修のように、JICAの国際協力事業の良さも併せて知ることができる機会が引き続きあるといいと思う。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

教育のみならず幅広い分野について学ぶことができて良かった。中には今まで関わったことがなかった分野もあったが、事前研修や現地での丁寧な解説のおかげで内容を理解することができ、自分自身の知見も広がったと思う。また、実際に現地で活動されている隊員の方々の話は、児童生徒へのキャリア教育においても非常に有効だと感じた。

今回、治安や研修期間の関係で行動できる地域が限られていた中、ウガンダ事務所で難民支援のブリーフィングが受けられて非常にありがたかった。安全面の問題で現地に行くのは難しいかもしれないが、実際の現場が抱えるより根深い問題についても知ることができると良いと思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

JICAや事務局の皆様が、非常にきめ細やかにご対応くださり、安心して研修に臨むことができた。また、9年前にウガンダにおける教師海外研修に参加された先生がJICA職員として同行してくださり、現在のウガンダだけでなく、ウガンダの変遷も含めて学ぶことができ、有意義であった。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

・より多角的な見方で物事を考えるようにする

達成度6割。国際理解のためには、自らが多様な視点で物事をとらえ、考えることが必要になる。日本では当たり前に行っていることが、他の国では当たり前のことなのか、「普通」とは何か、思い込みの中で暮らしてはいないかなどの考えをしていくことが大切だと考える。

身近にある当たり前について、もう一度考え直しながらの生活をしていると感じる。一方で、日本での不自由のない生活の中で気づかない点もまだまだあると感じる。

・日本での授業や生活を通して、国際的な視野、広い視野で見る大切さを伝える。

これから実施する。(2024年8月時点)

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

・ポランポランという言葉からわかる、ウガンダ人の寛容さ。

ゆっくり、という意味の言葉。難民を受け入れているウガンダの人たちは、一般的に広い心を持っていると感じる。気候に左右されない農業のおかげで、一年中食べ物に苦労することがなく、主食の豊富さから彼らは「豊か」であると感じている。そのため時間に追われて生活が困ることがない。首都カンパラの交通渋滞はとてもひどいが、もしかしたらあまり困っていないのかもしれない。だから信号があまりなくても気にしていないようにも見えた。

・ウガンダの気候について

生活するには一年中快適で驚いた。自分自身のイメージは生徒の事前アンケートと同じように暑い、という予想だったが良い意味で裏切られた。湿度も年中程よく、生活するには本当に快適。この気候によってコメが年間に3～4回収穫できる。たくさん収穫のチャンスがあるから、一回の収穫量は特に気にしていないのかもしれない。そのため、ばら撒きが主流で、肥料もほとんど使わず育てている。この国で条植えが浸透して、肥料をうまく使えるようになったら、ますます農家の収入が多くなり、この国の安定や発展につながるのではないかと思う。

・交通ルールについて

車は信号を守っているが、バイクタクシー(ボダボダ)は関係ない模様。歩行者やバイクが車の間を縫うように動いている。車が右折するときも、あまり譲っている様子がなく、歩行者や車はかなり強気にいかないと難しそう。日本の感覚だと、危ない！と思う瞬間が多々あった。しかし、右折し始めた車があると減速をしたり、上手くかわしたりする様子が見られる。事故が起きないのが不思議だが、これがウガンダ(カンパラ)の日常だと改めて感じた。

・People are people.

同じ人間が、同じ世界の一部で、同じように生活している。住んでいる場所や使っている言葉、人種の違いはあれども、幸せを願って生活しているのは地球上どこも同じだと感じた。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

・ウガンダという遠い国について、まず知る機会を設けていく。学校の掲示物コーナーを借りて、写真や説明などでまずこの国について知ってもらうことから始まる。授業でも「知る」部分は取り上げるが、その部分を大きくしすぎないようにしていく。国際理解というと、ピンとこない生徒が多いため、隣の人のことについて知ることが国際理解への第一歩ということを強調して、案外身近なところから国際理解をスタートできることに気づかせていく。

・自分たちとの違いに気づき、今の自分たちが世界のため、ほかの人のためにできることは何かを考えさせたい。

・目の前の当たり前のことは、本当に「当たり前」なのか。そのことについて考えさせることで、日本と他の国との違いに気づき、他国の考えや文化を受け入れることができる人材の育成に努めたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・一つの国やプロジェクトに対して、継続的に人材育成に励んでいる点。物資の供給だけを行っている国もあるが、現場に合っていない農機具などが送られる、という現状を聞いた。やはり大切なことは人材育成や教育なのだと改めて感じた。時間はかかるかもしれないが、日本の技術押し付けるのではなく、現地の要望や現状に合わせ対応している点が素敵だと感じた。「日本は魚をくれるのではなく、魚の釣り方を教えてくれる。」この言葉がとても印象的だった。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・一つひとつの事業について、現地にいる日本人の方が説明していただけるのがありがたい。現地で働く人たちの声は、現場を経験されているので説得力があった。忙しい合間を縫って対面で話せるのは貴重な機会だと思う。

・JICA関係者の方や、サポートしていただいた方達が本当に頼りになった。現地英語のリスニングが困難なときもサポートしていただいたし、健康面について心配していただいたり、時間調整をうまくしていただいたり、たくさんの現地スタッフとつながっていたり、安心できるドライバーやサポートであったり…。あげればキリがないが、ここまでしてくれる環境で研修を進められるのは本当に安心。

・今後途中に、休憩時間があればと思う。移動が多いのは仕方がないが、研修日程がびっしり入っているために、夜ホテルに帰ってから自分なりの振り返りと整理時間になった。(それすらしないで寝てしまうこともあったが…)せっかくの海外研修なのでたくさんプログラムがあるのはありがたいので、休憩とのバランスが難しい…。

6. その他全般を通じての感想・意見など

・とても貴重な機会をいただけたことに感謝しています。新たな世界を見て、新たな考え方が増えて、本当に参加して良かったです。普通に教員をやっているだけでは、決して経験ができないことなので、この経験を生徒や学校に還元していきたいと思います。今回の経験を生徒たちに伝え、生徒たちがどのように考え行動していくかが楽しみです。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

個人目標1

【自校の生徒が何を感じそうか、知りたいか、を常に考えながら、生徒目線でウガンダを視察する。】

設定理由・・・栃木県佐野市立北中学校は、佐野市で最も生徒数が多い(全校生徒605人)中規模校である。ごく普通の田舎にある中学校であり、コロナ後は留学生との交流等も断絶、校内の国際理解教育は全くないのが実際の現場である。生徒の国際理解に関する知識はほぼなく、むしろ知る機会が無いと言えるため、自分が今後この現場で世界とのつながりを考える授業を作るために、北中の生徒目線でウガンダ・日本について、研修を通して感じたり考えたりしたいと思った。

達成度・・・30% 実際にまだ授業をしていない、授業プランが具体的に決まっておらず悩んでいることからこの数値とした。北中の生徒目線に立つというのは自分にしかできないことであるが、自分のものさしと別で考えなくてはいけないため、色々とし難かった。実際にウガンダで現場を視察させてもらう中で、本当に素朴な質問しかできなかったが、聞きたいことはしっかり回答をもらうことができ、良かったと思っている。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

・気づいたこと:ウガンダで働く日本人は思った以上に多かった。JICA職員と協力隊ぐらいがイメージできていなかったが、JICA職員、関係者、専門家、スタートアップ企業、あしなが、日本食レストラン、クラブトバッグ工房など、様々なフィールドでお仕事をしている方々と直接お会いして話を聞くことができた。またウガンダに派遣されている協力隊員も、こんなに繋がりがあって多くいらっしやんと思っておらず、刺激になった。こんなに日本人が活躍していることを目の当たりにして、今まで全く知らなかった自分の無知さを感じた。

・気づいたこと:出発する前、後もたくさんの同僚の先生に「暑いでしょ?」と聞かれた。実際応募する前は自分もウガンダの気候について知らなかったが、こんなにステレオタイプの価値観があり、知らない国、知らないアフリカ、という扱いなんだなと思ってしまった。

・学んだこと:世界とつながるためには言語が全てではない、ということを学んだ一方で、一つ上の次元でより具体的な意思の伝え方や相互理解のためには高いレベルの言語意思疎通力が必須だと痛感した。相手の話を聞きとってあいづちや感想を短文で述べるだけではお互いに理解し合えたとは言えないと思う。今後も慢心せず地道に語学学習に取り組まねばと思った。

・感動したこと:あしながウガンダに訪問したときに子どもたちと一緒にダンスした時間が忘れられない。知り合ってから、国も立場も境遇もまったく異なるアフリカの地で、子どもたちとソーラン節を踊っているという状況が、かけがえがない瞬間に感じられた。ダンスをすることで、子どもたちの暮らしを変えることはできないし、明日が変わるわけではないけれど、それでも言葉で表せないような一体感の共有ができた気がしている。自分にとってこの経験は忘れられないと思う。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

・事前アンケートを確認してみると、生徒たちはアフリカ・ウガンダについてほぼゼロの知識であるので、まずは関心をもって、ウガンダに親しみやすさをもってもらうことを単元計画の前半のねらいにしたい。
・日本との比較をするなかで、どうしてもハード面でのネガティブな印象がクローズアップされてしまうことが予想される。しかし授業を立案・実施していく中で「ウガンダに比べて日本は恵まれているんだからそのぶんちゃんとしなさい」のような趣旨を暗に示すような方向性には持っていきたいと思う。きちんと両国の良い点、改善点を自分たちで考えて、自分なら今後どうしたいか、という授業設計になるよう留意したい。

・中学1年英語の単元で[Discover Japan]という章がある。国際理解というのは、他の国の文化を知るだけではなく、自国の文化や習慣を発信していくことが同じくらい大切であると実感した。しかし事前のアンケート調査では、「国際理解とはなんだろう?」という質問への選択肢「日本を知ること」と回答した生徒は複数回答可だったのにもかかわらず、ゼロだった。そのため、生徒にも、ウガンダを知るだけで国際理解ができたと思うのではなく、どんな人にも自分が思う日本の文化・好きなところを伝えられることを含めて学ばせたい。授業の兼ね合いでこの章を授業実践にもっていくことはできないが、英語の科目特性を活かし、自分の授業にウガンダの要素を落とし込みたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・JICAで、またはJICAを通じてご活躍されている方々とお会いして、全員がプライドと情熱をもって、専門知識を活かし事業に取り組まれている姿が印象的だった。自分は海外で働くこと自体にふわふわと現実味がないものを感じているが、それぞれの分野でこの状況・社会を変えていきたいと思う力の強さを感じた。海外が優先事項ではなく、やりたいことがあって、それが海外(ウガンダ)だった、というお話を聞いた時ははっとした。

・自分が思っている以上のODAの多さ、きめ細やかさに圧倒された。また、資金援助だけではなく、さかなの釣り方を教える支援を、という理念は素晴らしいと思う。ひと昔前の流行だった、やりっぱなしの支援・資金のみの援助は、功績を堂々と語ることはできても、多くの現地の人にとってプラスに働いていなければ全くの無意味だと思う。そういった心配がJICAのODAには無いので、もっと日本の世の中に知ってもらいたいと思う。

・安定したゆるやかな長期的平和がウガンダ支援の成果が見えやすいポイントであると伺った。また人材育成に力を入れているということで、人づくり・信頼づくりは長期的視野で考えることが必須だと思うため、ウガンダのよさがうまく人材育成に作用していたら嬉しい。教育は人づくり、と言われるため、人を教える・変える難しさは教員がよく分かっているところであると思う。どんなに時間と熱量をかけても変わらない時は変わらないし、逆に思ってもみないところで変わったりすることが学校では常識で、そんな悩みごととも現場ではあるんじゃないかなと勝手に想像した。国際協力事業の現場ではあるあるの、ちょっとした困りごとの視点があつたらイメージもより湧きやすいかなと思った。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・事前研修も含め、研修の準備物等も”まえもって”連絡をくださっていた。想定外のことがたくさん起きたが、前もって準備ができていたので、視察、交流授業もそこまで慌てずに動くことができた。これが最初からギリギリで不安だらけの状態ですスタートしていたら、きっともっとパニックに陥っていたと思うので...

・事前研修がもう1日あると嬉しい。例えばたくさんの訪問先・施設があつたが、それらをもっと具体的に調べたりグループでどう授業に落とし込むか、どんな目的・視点をもって臨むか協議したりして、イメージをふくらませた状態で訪問できれば、振り返りがより具体的にできたかと思う。(直前で訪問先がキャンセル・変更などは大変だが...)

・協力隊員も含め、たくさんの校種も県も違う先生たちと出会うことができたのが嬉しい。バックグラウンドは違っても同じような志をもっている先生がこんなにいることが嬉しく、たくさん話をしたたくさん学ぶことができた。

6. その他全般を通じての感想・意見など

・10日間、いい意味で休む暇もなく盛りだくさんの内容でとても充実した貴重な経験だった。メンバーが想定外のことが起きても臨機応変に対応してくれる方々ばかりだったので、きもちが楽だった。心をすり減らしている普段の学校勤務よりはるかに毎日元気で、自分のリフレッシュにもなった。自分にとって大事にしたい価値観や生き方、教員の仕事の本来の魅力について、いろいろなことを改めて考え直す機会になった。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

本校生徒は国際問題に対する関心が高く、将来世界で活躍したいと考えている生徒が多くいる。学校教育を通して、国際問題をより身近に考えられるようにしてもらいたい。そのために、まずは私自身が世界のことを自分事として捉え世界に目を向けることで、より多くの生徒が今まで以上に国際問題について考え、理解を深めようとする生徒が増えるのではないかと感じた。私がこの研修に参加することで、関心を寄せて声をかけてくれる生徒も多くいた。また、国際理解教育は全教員が当事者意識を持ち学校全体で関わっていくことが大切であると感じている。学校全体で国際理解教育を深めたい。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

様々な草の根事業の中でも、女性の生理で学校にいけなくなってしまう女子学生の教育環境改善事業が印象的であった。すべての子どもたちに平等に教育を受ける権利を与えたいと思う中、ウガンダに滞在されている日本人の活躍によってハピプロモーションが立ち上げられた。対象は女子学生に向けてだが、布ナプキンの製作には女性だけが携わるのではなく、男女問わず関わることで女性の抱えている問題をより広く知ってもらうきっかけに繋がっていた。その他にも、学校に着替えや、石鹸、布ナプキンの準備、女性生徒のためのルームが設けられた。私はこの草の根事業の話を伺うことができ、日本の女子生徒が抱えている問題と重ねて考えることができた。今後学校にも取り入れていきたいと感じた。そして、立体交差点の工事現場では日本の建設会社の方が、ウガンダの若者と一緒に働いている姿に感動した。同じ日本人の方が、現場で活躍している姿を目の当たりにして刺激をもらった。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

あしながウガンダを訪問して、教師は学校生活、授業を通して、生徒の視野を世界に向かせるためには何をどう伝えたらいいのか、常に考えていかなければならないと感じた。授業では、学び合いの活動をより増やしていけるようにし、周りと助け合いながら生きること、自分自身の成長に繋がっていることに気づいてもらえるようにしたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

視察先で様々な事業を行っているのを見聞きした際に、今後長い目で見たときに継続していける政策・施策が多かった点、そして何よりも現地で調達できるもので補っていたところが、現地の人に寄り添った考え方で素敵で良いなと感じた。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

現地で活動されている方に直接会ってお話しが聞けたことがとっても良かったです。

6. その他全般を通じての感想・意見など

ウガンダでは、様々な事業を通してウガンダと日本が深い繋がりを持っていることを知り、ウガンダと日本の関係について学ぶことができた。特に学校訪問では、「教育」という我々の専門分野の研修をさせていただき、この国における教育の在り方について知ることができた。改めて教育の大切さを感じた。また、難民の受け入れに関して、とても寛容で素敵な国だと思った反面、自国の人たちにとっては求人が減ってしまうなどプラスなことだけではないと疑問に思っていたが、様々な研修を通して、難民が生活していた僻地にインフラが整備されるなど良い面があることがわかり疑問は払拭された。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

目標:日本との違いについて知る・ウガンダのよさを知る

達成度:生活の環境が日本とは異なることが多いと思ったが、ウガンダにも日本とは違うよさがあることを研修を通して感じる事ができた。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

ウガンダで出会った子ども達に夢を尋ねると全員がすぐに自分の夢を言えることに驚いた。どんな環境であれ、将来に希望をもって生活していることに感動した。小学校の教育が大切と現地の方が話されていたが、改めて教育の大切さについて学ぶことができた。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

今回の研修で見てきたことや聞いてきたことを生徒たちに伝え、自分たちにもウガンダまたは途上国のために日本にいてもできることは何か、それを実際に行動に移すためにはどうしたらよいかを考えたい。現地の子どもまたは活動している人達と繋がることで、アフリカは遠い場所ではないと感じてもらいたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

草の根事業の活動は、女子生徒が学校に通うための支援に大いに繋がっていると思った。

学校に養護教諭がいないという話があったので、生徒の健康やメンタル面のケアのために養護教諭に関する事業があるといいなと思った。

5. ここまでの研修に対して「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

学校以外の現場も視察することができたことで、日本とウガンダの繋がりを感じる事ができたのがよかった。

実際に家庭を訪れて家の様子を見たり話を聞いたりして、難民との関わりを見たりすることができたらいいと思った。

6. その他全般を通じての感想・意見など

日本との関わりはあまりないと思っていたウガンダが、身近な国に感じる事ができた。それは実際に訪問することができただけでなく、現地で働く日本人の活躍やその日本人への周りの評価から感じる事ができた。途上国と聞くとマイナスの言葉が出てきやすいが、今回の研修で知った途上国にもいいところがあるということを伝えていきたい。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

・多くのものを見て、触れて、体験して「自分ごと」として感じたことを生徒たちと共有し、世の中には未知の素晴らしい世界があることを伝えたい。

→多くのものを見て、触れて、五感で感じる事ができた。すべてが新鮮で一瞬たりとも見逃すことがもったいないと思えるほど、ウガンダを目に焼き付け、感じた思いを心に残してきた。その結果として、ウガンダだけでなく自分の身の回りの事象への興味、関心をもつこともできた。今後、共通点、相違点を生徒に伝えることで、未知なる世界への扉を開かせられるよう、伝え方を考えていきたい。

・自分の置かれている場所で活躍している人たちの「考え方」や「生き方」を知り、前向きに生きていくことの大切さを伝えたい。

→生徒たちに伝えていくのはこれからになるが、私自身が今回出会った方々から、大きな影響を受けた。困難な場面に直面しても前向きに頑張っている人たちのその想いを伝えられるようにしたい。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

・ウガンダの人たちの国民性や考え方、生活様式や様々な制度など、当たり前ではあるが歴史的要因や地理的要因、宗教的要因が大きく影響していると感じた。地歴・公民科の教員として物事の背景を考えていくことの大切さや、多角的、客観的(時にクリティカル)に考えていくことの必要性を感じた。

・ウガンダが抱える諸課題については、グローバル化した現代においては自国のみで解決するものではなく、関係する国々と協働していかなければならないと感じた。そしてその中に遠く離れている日本もしっかり入っているということに気づいた。

・現地で活躍する方々の熱い思いはどの場面でも心に残った。生徒たちに伝えたいし、できたら直接お話いただきたいという思いを強くした。「他人と比べて自分を知る。その差が大きければ大きいほど、より自分を知ることになる。だから私はアフリカにいる。」ある隊員さんの言葉です。感動した。何をしてもまずは自分を知ることが大切。自分の強みを活かす生き方を生徒たちにもして欲しいと思った。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

・本校の生徒は家庭環境などから経験値が少ない生徒が多く、広い視野をもつことが難しい生徒が多い。また卒業後ほとんどの生徒が地元に残るが、地元についての関心も薄くわずかな人間関係の中で生活している。そこで、「地域研究」の授業において地域の諸課題だけでなく、地域の良いところや資源をウガンダに発信し、逆にウガンダからの情報を得る交流の場を設けたい。自分のいる場所の様々な側面を知ること、ウガンダとの共通点、相違点を知ること、そして価値観の違いに気づくことが、他者尊重、他者理解につながり、広い視野で物事を捉え、自己の生き方を考える一助になるような授業を行いたい。

・この研修で出会ったものや人など、私の想いを生徒に伝え共有することは、大変難しいことだと思う。生徒たちの基礎知識が薄いことが想像できるので、多くの教科を巻き込みながら教科横断的な学習内容にしていきたい。そのためにも、まずは、校内の同僚たちに想いを伝えたい。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・支援のニーズをリサーチして必要な支援を行っているところ。

・現地のコミュニティの生活向上を第一に考え、JICA支援の終了後も持続できるよう地域力、マンパワーを育成しているところ。

・インフラ整備の支援に関して、本邦技術を基本としているという話を伺った。そのうえで現地の人から技術を教わることもあるというお話も伺った。お互いを尊重し一緒に作り上げていくという姿勢が素晴らしいと思う。

5. ここまでの研修に対して「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

・関わる方すべてが優しく、おおらかな気持ちで対応して下さった。安心・安全に研修を受けることができたことに感謝したい。

・参加者の意向を確認して下さり、柔軟な対応をしてくださった。

・様々な分野の支援を視察できたこと、その一方自分の興味を深堀するためには一部選択できる日程ももし可能であれば今後検討していただけるとさらにありがたい。

・一日の振り返りの時間をつくっていただけたこと。次の日になってしまうこともあったが、やはりその日のうちに行えた方が個人的にはよかった。

・事前研修に関しては、あと1回対面での研修がもてるとありがたかった。特に交流授業の準備にあてられるとよいと思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

- ・渡航前に訪問先についてリサーチをしたり、事務局から紹介していただいた3冊の本を読んでいったことが、現地での説明を理解するのに大変役に立った。先入観をもつことはあまり好ましくないと思うが、個人的には基礎知識として学んでおいてよかった。事前の情報提供等が大変ありがたかった。
- ・成長マインドセットをもつことの大切さをあらためて感じた研修だった。失敗や恥ずかしさを恐れず、行動する。これは生徒にも求めたいことである。生徒にとって身近な存在である教師が行動することで、何か感じてもらえるという期待をもって。
- ・多くの人とつながることができた研修でした。このご縁を大切にしていきたい。

